

図書館報

光丘

No.146



「長崎に本間郡兵衛の足跡を追って」

医師 本間 利美

先日の光丘文庫での「本間郡兵衛の生涯」についての拙いトークに、多くの方においで頂き、また終了後もご質問、ご追加を受けたり、私にも楽しい時間となり、厚くお礼申し上げます。本間郡兵衛については、まだ謎の部分が多く、残りの書簡を読み解くことで、歴史の空白の部分が埋まっていく可能性がありそうです。今後ともご指導をお願い致します。

本間郡兵衛の生涯をたどってみますと、蘭学から英学へと移った時期は長崎時代で、特に関係資料が少なく、謎の部分が多くあります。実際長崎に行き自分の目で確かめようと、昨年の五月の連休に、長崎旅行を実施しました。まず第一の目的は長崎に郡兵衛のモニュメントがあるとの情報があり、その存在場所を情報源に尋ねました。まったく意外なことが判明しました。事

実モニュメントは存在したのです。長崎旅博に作られた「長崎遊(遊)学の標」(写真)で、台座には江戸時代に長崎に遊学した七七二名(伊藤博文、勝海舟ら)が県別に記されていたそうです。が、十三年後に新規港工事のために撤去されたそうです。まったく啞然としました。先祖の業績の記された像を見るべく訪長のツイッターの恨み節が多数見られました。すでに出発前に目的の一つが幻となりました。

しかしやることはまだあります。郡兵衛が在長崎時、下宿先にしていた古木玄順の今博多町(編笠町)と、フルベッキ先生の借家の出来大工町の住所を確かめることでしたが、二つの町は隣り合わせで目と鼻の先位の近く、郡兵衛が日本語を、フルベッキが英語を一所懸命教え合った様子が目に浮かんできました。二つの町名は確認できましたが、子

孫の行方は不明でした。

もう一つの大きな目的はフルベッキ研究者を探し出し情報交換し、我家に保存されているフルベッキ関係の資料をお渡しすることでした。以前フルベッキ関係のシンポジウムを開催した長崎歴史文化博物館にアポをとり、長崎着後に直ちに訪れましたが、担当者が退職フルベッキ研究会も活動していないとのこと、その対応には全く失望しました。関係資料を渡しましたが、その後コンタクトは全くありません。



長崎遊学の標

他にフルベッキについての情報を得るような手立てもなく、二日目は長崎市内観光にしました。県庁の近くで地図を見ているところに一人の女性が近寄ってきて、「何か探しているもの」との話。近くを一緒に歩いているうちに、山形か

ら二百年来の祖先の下宿先を探しているとの話をしました。そんなロマンのある話ですかと感激して、何か手助けになればという話になりました。それは博物館ではだめで、私の知人の先生に聞いてあげますと申し出ました。初めて会った女性に頼むのも何かの縁、救い舟に乗ることにし、フルベッキ先生の資料のコピーを預け、帰途につきました。

八月のある日、長崎からのO女史からの電話を受け取りました。病気をして返事が遅れたが、一、三の先生に調査をお願いしましたとのことでした。続いての電話は長崎古町教会の藤井牧師さんからでした。(古町教会はフルベッキ先生ゆかりの教会です。)三度目の電話は待望の森田先生からでフルベッキ研究者だと名乗られました。ついに小さな奇跡が起こりました。あの長崎のカステラ文明堂の前でのO女史との出会いが、ついに目的の人につながりました。森田先生からは、大量のフルベッキ関係の資料が送られてきました。森田先生が捜していたフルベッキ先生の長崎当時の空白がびったり埋まるようです。

案外目にするここのない

白鳥の生態(三)

日本白鳥の会理事 角 田 分わかっ

採食と器官の構造

白鳥が水田で落ち穂をついばむ姿は晩秋の庄内平野ではもう欠くことが出来ない風景だと思えます。その白鳥は、採食のためにくちばし等に他の鳥類とは違った構造があるのです。

白鳥の採食の方法にもいろいろな方法がありますが、今回は白鳥の採食のための器官と構造のみに的を絞って述べてみたいと思います。

くちばしの構造

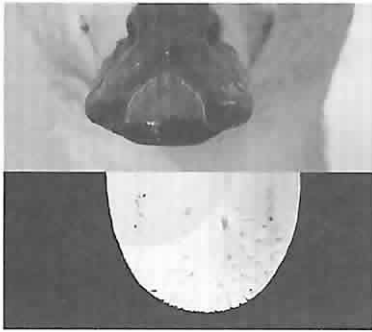
白鳥は泥の中の餌を探して食べる必要がありますが泥の中の餌を「これは食べられる」と何で判断しているのでしょうか。泥の中ですからもちろん目で見ることは出来ません。白鳥のくちばしの先端に『嘴

爪(はしづめ)』という部分があります。

左の写真が嘴爪の拡大部分とその骨格写真です。骨格写真でおわかりのようにくちばしの嘴爪の周辺部分だけに神経組織の存在を示す沢山の穴が見られます。

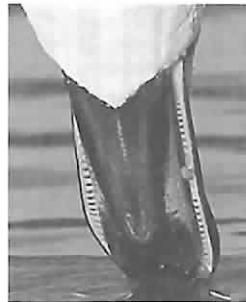
白鳥は、泥の中でくちばしの先で銜えた物が食べられるかをここで判断しているのです。

採食に関する器官はこれだけではありません。驚くような構造がありました。



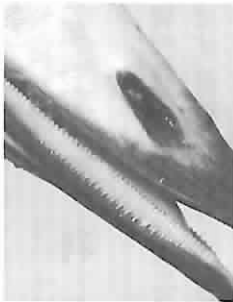
板歯と舌の構造

白鳥のくちばしの周縁部には『板歯』と呼ばれる人間の歯と同様以上の働きを持つ構造があります。板歯は二重の構造になっていて、一番外側は、上くちばしと下くちばしの凹凸がきちんと咬み合うようになっていて、しかも上くちばしが大きく下くちばしを抱え込むようになっていきます。



凹凸の板歯

その内側には、私たちが食事の後に使用する歯ブラシと同じような構造のブラシ状の板歯があります。



ブラシ状板歯

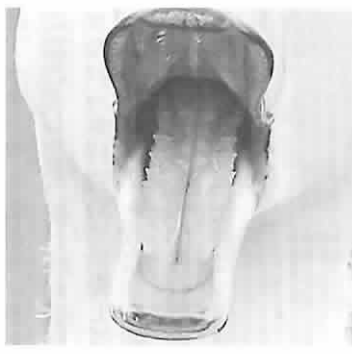
これらの板状歯は、水中や水面から採食した小さな藻類や穀物片等を上手にくちばし

の中に漉し残したり、草などを切り取るための構造と考えられます。

採食のためと考えられる構造は舌にもありました。

舌の構造は、主に採食物を漉し取るための物と採食物を食道に送り込むための物との二つに分類できるようです。

舌の上にはくちばしの板状歯に覆い被さるように横への突起(少し透明な膜状の物)があります。これは板状歯と一緒に採食物をくちばしの中に漉し残す働きをしていると考えられます。



右の写真を見てもわかると思いますが、舌の上に人間の舌にはない横列突起が何列もあります。これは、くちばしの中に取り込んだ穀粒などを効率よく食道に送り込むための構造と考えられます。この写真では見えませんが喉にも数

本の突起物もあります。この突起物は、飲み込んだ採食物が食道からくちばしの中に逆流してくるのを防ぐ働きをしていると考えられます。小鳥やニワトリが水を飲む時、わざわざくちばしを上げて飲み込むのは良く目にする光景ですね。首の長い白鳥には、特に首の長さに対応した構造が備わっているのだと考えられます。

白鳥の採食行動については今回触れませんでした。このくちばしの構造を使って白鳥はいろいろな採食方法での行動もしています。今度白鳥が採食しているのを見かけた時には、採食のためのこれらの構造を思い出して下さい。

この採食のための突起構造が、釣り人が残していったテグス等が引っかかると逆にとれなくなり、命に関わる危険性も持っています。自然界にないものへの対応は、やはり白鳥の体には構造として備わっていないようです。

同じ自然界の共生者として白鳥たちへの思いやりも持って釣りを楽しめる心ある人間でありたいものです。

◆庄内に魅せられて◆

東北公益文科大学

特任講師 中原 浩子

庄内に移住して早いもので五回目の冬を過ごしている。

千葉で学習塾を経営し、多くの生徒と学ぶ楽しさに充実した日々を送っていた時に出会った映画「おくりびと」。この出会いが私の人生を変えた。映画館でスクリーンに映し出された景色の中に、私が随分昔に諦めていた、しかし、心から希求していた美しい日本の姿があり、その景色に会いたくて、結局、映画館に十回通った。

初めての庄内訪問を前に森敦の小説「月山」を読んだ。文章の中に描かれた庄内は私が見てきた以上にリアルな感じが、それまでに経験したことのない独特の空気感を醸し出し、それが更に庄内への興味を掻き立てた。

実際に庄内を訪れた二〇〇八年十月四日。初めて酒田駅に降り立った時、あまりの空気の甘さに驚愕した。その後、水のおいしさ、湿潤で芳香な空気、そして美しい自然にすっかり虜になってしまい、一年四カ月の間に二十回庄内

を訪れることとなった。

初めての訪問時、偶然その催しを聞いた佐佐野芸能大会で「おすわり大黒舞」を観る機会を得た。丁寧な演目説明により「天保国替え」の事を知り、この地の住民意識の高さ、彼らが持つエネルギーと実行力の強さに感心して、庄内という土地の歴史に心惹かれ、書店に向いては郷土史を扱う書物を買って夢中になって読んだ。

その中でも「奥羽越列藩同盟」という書物に出会い、この地の人の義の篤さ、想い、信念というものに感嘆した。

結局、二〇一〇年春に庄内へ移住し観光の仕事に就く。縁を頂いたのであるが、仕事に取り組むたびにいろんな場面であれこれの土地の歴史、食の歴史、民俗芸能の歴史、食の歴史、風習の歴史など、それぞれの記録がきちんと書物に残されていることに感服した。

映画「おくりびと」が私の人生を変えるきっかけとなったのだが、その憧憬をより強い確証に変えていったのが、庄内を著した書物であったと思う。

私にとって書物とは、幾ばくかの金額である素晴らしい知識を持つ人達と対話できるものであり、亡くなった先人とも対話できる魔法のような魅力に溢れるものだ。

庄内の歴史や魅力を語り継いでいた書物がなかったら、私は移住する決意をしていなかったかではない。

さて、観光に関する仕事をするのが多くなった私は、庄内の魅力は何かという質問をよく頂く。観光とは「地域に光を照らす」ことであると言われる。では、庄内の光とは何か。この土地はこんなに質の高い豊かな歴史や伝統・文化・民俗芸能・風習を持ち、それをきちんと継承している。

しかし、その希少さ、素晴らしい光として地元の人たちは捉えているだろうか。

その土地にしかないもの、その土地だけにあるもの。それは、庄内・酒田の場合、もちろん美しい自然もあり、美味しい食もある。様々な観光施

設もきっかけとなるであろう。しかし、私は、そこに生きる人々こそがその土地にしかない魅力であり光であると思っている。ここに生きる人々とは、現在生きている人々だけを指すのではない。三十六人衆に始まり、この砂瀧、酒田を作ってきた人々、黒松林を作ってきた人々、天保国替えを阻止した人々、湊町酒田の隆盛を実現し一世を風靡する町を作った人々。そして、それらを大事に大事に紡いできた人々。そういった全ての人々の想いや行動の積み重ねがこの土地の魅力を生み出し、光となっているのではないだろうか。

何の歴史も持たない新興住宅地に住んでいた私には、この土地の持つミルフィーユのように何層にも積み重なった歴史が羨ましくて仕方がない。

私に移住を決意させたものは、この長い年月をかけて積み重ねられた庄内の土地の魅力なのだ。今更ながら思う。なぜなら、五年住んだ今でも庄内の各所で私の好奇心を掻き立てる歴史や文化・伝統を次々と教えて頂く機会が続き、決して止むことがない。庄内

の魅力とは、特別なことではなく、まさにそこに住まう人々の暮らしそのものなのだと確信している。

この地における観光の魅力づくりとは、庄内が庄内であることの重要性を認識することだと考えている。これまでがそうであったように、これからの庄内も、庄内が庄内であり続けることこそが魅力であり、そのことを地元の人が認識することが重要なのではないだろうか。この町も没個性的で同じような土地になっている現在の日本の中で、庄内だけは庄内であり続ける誇りを持った生き方を選ぶ。それこそ義民である庄内人らしい生き方ではないかと他所から来た私は憧れを持って考えている。



「宝の日」に再び降り立つもの

吉野弘さんの詩をめぐる対話 第2回

酒田・詩の朗読会 主宰 阿蘇 孝子
月刊SPOON元編集長 佐藤 晶子

佐藤 昨年(二〇一四年)一月十五日夜、詩人の吉野弘さんが、穏やかな静寂のうちに逝去されました。満八十八歳にあと一日のことでした。吉野さんのあの笑顔もあの声も、もうこの世では逢えないと思うと、たまらなくさびしい気持ちになりました。詩人の「死」の知らせを、阿蘇さんは、どう受けとめましたか。

阿蘇 ふいに姿が浮かんで来たんです。初めてお招きした朗読会の後、車でお送りしたご親戚の高山さん宅の玄関前で、背伸びして、車が見えなくなるまでずっと手を振ってくださいました。吉野さんの姿が…。そして「スギサツシマイマシタネ」と呟いていました。「過ぎ去ってしまっ

ふと、酒田市立資料館の展示で見た若き日の手書き文集を思い出していました。「人間生活の上によりよきものを植えつける詩を私は歌ふのだ」「私は人間の自然な姿を歌い出そうとするのだ」「人々と共に人々と共に詩を歌はねばならない。いわば人間として、詩人の生を生きることへの決意表明。そして、あくまで読み手とつながろうとする強い思い。だから吉野さんの詩は飾らない、誰にでもわかりやすい言葉で記されている。

佐藤 昨年の七月二十六日には、酒田市教育委員会主催による、吉野弘さんの作品朗読会が羽遊心館で開催されました。酒田飽海地区の六つの高校の図書委員の方々と、酒田の朗読サークル「秋桜の会」の有志の方々が朗読してくださいったのですが、私は酒田市からのご依頼で、朗読作品プログラムの企画編集や当日の司会進行などのお手伝いをさせていただきました。このとき、阿蘇さんは、各高校の出演者全員の朗読指導を引き受けてくださったんですよ。その

瞬間に立ち会えたことが…。佐藤 十月十七日には「宝の日」と題して、阿蘇さん主催による吉野作品の朗読会が希望ホールの小ホールで開催されました。この日、静岡県富士市から吉野さんの奥様、喜美子さんと次女の万奈さんも駆けつけてくださいました。前後して、酒田市立資料館では、吉野さん関連の貴重な展示物も拝見できました。前回、この連載で阿蘇さんは、一九八九年秋に、吉野さんを酒田に招いて初めて開催した朗読

会が、まさに「宝の日」だったと書いていました。十月の朗読会開催を決意するに至った経緯を聞かせていただけますか。阿蘇 吉野さんが一月にお亡くなりになってからずっと、何か私に出来ることはないかと考えて続けていました。その一方で、おこがましくはないかという思いもありました。七月に高校生の朗読指導をさせていただいて、何か彼らから勇気を貰った気がして、少しずつ力が湧いてきていました。そんな時、「それをつくると彼はそこにやってくる」、映画「フィールド・オブ・ドリームス」ではないけれど、ある時、すんとこの言葉が降りてきました。そうだ。初めて吉野さんから来ていただいた朗読会。あの宝物の日をそっくり再現してみよう。希望ホールの小ホールに小さな林を創りました。木の側には不在の椅子を置いて…。朗読会は、吉野さんの言葉の力と集まった方々の聴く力があって、温かくも豊饒なものとなりました。終盤、「父は私たち家族にとって、本当に普通の父でした」。挨拶に立ってくださった万奈さんの言葉。心に残る一言でした。それが吉野弘。何より、フツウであることを大切に詩人。

手ごたえはいかがでしたか。阿蘇 初めは光陵高校の図書室で、飽海地区六高校の図書委員研修会のときでした。そこで各校三名の生徒さん一人一人が吉野さんの詩を朗読してくれた。びっくりしました。うれしい驚きでした。こんなにも瑞々しい感性で吉野作品が詠まれるとは…。半世紀も前の詩があらたな息吹きを得て鮮やかに輝いている。感慨深かったです。そんな

佐藤 阿蘇さんは、各高校の出演者全員の朗読指導を引き受けてくださったんですよ。その

「虹の足」が降り立ち、「生命は」光り輝くことを祈りつつ。

「過ぎ去ってしまいましたね」それが何であるかわからぬまま



吉野 弘 (よしのひろし 1926~2014)

酒田市出身。酒田市琢成第二尋常小学校、酒田市立商業学校を卒業後、帝国石油組合に入社。戦後は、労働組合執行部で活動。肺結核闘病中に詩作を開始。1952年、「I was born」で詩壇デビュー。1957年、酒田の『餅』の詩を『会より第1詩集』『消息』で出版。1972年、第4詩集『傷旅』で読売文学賞を受賞。1994年、青土社より『吉野弘全詩集』を刊行。

諸家文書目録

Ⅲ・Ⅳ

酒田市立光丘文庫古典籍調査員

田村真一

「今井家文書」

「今井家文書」は江戸時代、現在の酒田市局で肝煎などを務めた今井徳右衛門家に伝わる文書です。

- 局の地名は出羽三山の開基とされる崇峻天皇第三皇子・能徐太子(峰子皇子)が御共の局(後宮に宮仕えする女官で、皇子が幼少の頃から養われた乳母)と当地に滞在し御共の局がこの地に留まったため局と呼称されたと伝えられています。
- 当地の支配権は中世後期から近世にかけて左記のような変遷を辿りました。
- ① 天正19年(一五九二)より上杉景勝
- ② 慶長6年(一六〇一)より最上義光
- ③ 寛永9年(一六三二)より丸岡領
- ④ 承応2年(一六五三)より天領(幕府領)
- ⑤ 天明4年(一七八四)松山藩領
- ⑥ 天明8年(一七八八)天領
- ⑦ 元治元年(一八六四)庄内藩領

これを見ると中世後期から明治の声を聞くまで庄内に支配権を持った為政者が一度は局を領地にしたことになりました。これは究めて稀有なことです。

丸岡の天澤寺(曹洞宗)には加藤清正の菩提を弔う「清正閣」がお祭りしてあります。周知の通り加藤清正は豊臣秀吉の家臣として活躍、特に朝鮮出兵で名を馳せました。

関ヶ原の戦いでは石田三成との不仲や将来の豊臣家のことを考慮し徳川方に付きました。関ヶ原の勝利に際しその武勲として清正は家康より肥後(熊本)54万石を与えられました。

その後、清正の三男忠廣が家督を継ぎました。が、藩内の内紛や忠廣の統治能力などが幕府内で問題視され、寛永9年(一六三二)に加藤家は改易に処されました。加藤家改易の真の目的は徳川幕府による豊臣方大名の肅清と言われています。

忠廣は庄内・酒井家に預かりとなりました。時の藩主・酒井忠勝は廃城になっていた丸岡城跡に忠廣を住ませ手厚く保護しました。忠廣は配流の際、父清正の遺骨を捧持し

てきました。忠廣は丸岡で22年間過ごし、承応2年(一六五三)、53才で没しました。忠廣は本住寺(鶴岡市・日蓮宗)に眠っています。

さて、当文庫が収納している「今井家文書」は検地帳・名寄帳・年貢取立帳・宗旨人別帳・御用留帳・五人組控帳・地租改正資料など藩政期初頭から昭和初期に至るまで433点上ります。

刮目すべきは寛政6年(一七九四)の「五人組帳控」、弘化2年(一八四五)の「御仕置五人組帳」、安政5年(一八五八)の「御仕置五人組帳」等々の五人組関係資料。それに、どこの寺院の檀家になっているかが確認できる元治元年(一八六四)の「局村宗旨人別御改帳控」などの文書です。

五人組帳は五人組制度に基づいて作成されています。その概略は農民の守るべき事柄を記した前書と、これを遵守することを約束した構成員の連名・連判から成り立っています。

農民を基盤とする幕藩体制にとって五人組帳作成は末端の農民をも支配する大変重要な政策でした。その内容は主に以下のよう

なものでした。

- ① キリスト教の禁止。
- ② 年貢は皆済し、諸役は堅く守る。
- ③ 親孝行をし、兄弟・夫婦仲よくすること。
- ④ 農業に精を出し勤めること。
- ⑤ 捨て子、捨て馬の厳禁。

農民は何か問題が起こった場合は常に五人組への報告が義務づけられていました。五人組関係資料から浮かび上がってくることは、農民が

いかに生活の隅々まで事細かに為政者によって規制されていたかということです。言い換えれば、幕藩体制の基軸である農民のプロテストを為政者が、いかに恐れていたかを物語っています。

宗旨人別帳は江戸幕府が施行した宗門改めに付随するキリスト教を阻止するための一つの政策でした。宗門人別帳は戸籍原簿となり、また、租税台帳の役割をも果たしていきます。宗旨人別帳は寺請制度、檀家制度とともに三位一体をなすものです。

これらの制度により民衆はいずれかの寺院に檀家として入らなければなりません。これにより寺と檀家との間に、ある種の支配関係が生

じ、寺は仏法を説くより、葬式・法事を重視するようになっていきました。

「局村宗旨人別御改帳控」には所属する寺院とともに家族単位で人数・性別・年齢それに租税が詳細に記されています。

「今井家文書」は藩政期の礎となる資料が多く、江戸時代の郷村支配構造を知るうえに、極めて貴重な史料群といえます。

「小山太吉家文書」

小山家の先祖は石川県能登で網元をしていた小山清左衛門という人物でした。石山合戦(本願寺と織田信長の戦い、元亀元年(一五七〇)から天正8年(一五八〇)にかけて行われた)の後、清左衛門は真宗大谷派・普明寺の祖・賢心とともに船で能登興野に着き、ここに住み付きました。

その後、幾代か経て江戸中期の代の小山清左衛門の弟・小山八右衛門が船場町に分家し廻船問屋を営みました。

この八右衛門家の子が安永年間(一七七二〜一七八〇)の頃、船場町に分家したのが小山太吉家の祖先と言われています。これもまた廻船問屋を

生業なまがわとしました。

現在、光丘文庫が所蔵する「小山太吉家文書」は140点余りです。

その主だった資料は以下の通りです。

「酒田町政史料」「無尽講史料」「明治27年庄内大震災の見舞状」「小山家財家計史料」

「愛国婦人会」「寄付金等の領収書」「酒田米穀取引所関連資料」「農業」「義援金」等々。

明治27年(一八九四)の庄内大震災で船場町の太吉家の家は類焼し、それ以前の史料は焼失してしまいました。現存する史料は震災以後の五代目太吉(一八五七～一九一〇)以降の時代のもです。

五代太吉は長く酒田町議員を勤め最上川及び酒田港改修に尽力しました。また、明治30年(一八九七)秋田町に旧庄内銀行を設立し、専務取締役に就任。同年12月には酒田商工会議所初代会頭に、明治37年から亡くなる54歳まで酒田町収入役を務めていました。

小山家の史料は明治期酒田の経済界の動向、社会情勢、風俗、生活状況を知る貴重な史料です。

因みに小山家七代目は小山孫次郎元酒田市長でした。

デザイン 佐藤 十 弥



読書感想文

第六十回青少年読書感想文
コンクール山形県審査会

〈小学校低学年自由読書の部〉
○最優秀

ほくもみだいな、
むしたちのパーティー

酒田市立松原小学校
一年 佐藤 恵音



なつのゆうがた、せみのよ
うちゅうをさがしにいくな、
ぼくはたのしみです。つちの
なからでてきたようちゅう
をいえにつれてかえってみて
いると、せながわかれて、せみ
のせいちゅうがでてきます。

うすいみどりのはねがすこし
ずつちやいろになって、のび
ていくのをみていると、せ
みってすごいなあとおも
います。

むしのふしぎなへんかが、ぼ
くはだいすきです。

としゃかんでこのほんをみ
つけたとき、おもしろいなあ
とおもいました。いつもはせ
なからみているむしを、お
なかのほうからみられるから

です。ぼくもかえるをおなか
がわからみたくがあります。
まどガラスに、きゅうばんみ
たいにぴたりついていいるあ
しやあごがよくみえて、うら
がわっておもしろいなあとお
もいました。

このほんのやどには、よる
になると、たくさんのむした
ちがあつまってきます。あか
りにさそわれてもりからやっ
てくるむしたちは、とてもお
しゃれです。ぼくが一ばん
びっくりしたのは、がです。く
ろいマントをはおったドラ
キュラみたいながや、オレン
ジの三かくじょうぎのかたち
のが、かぶきのかおのような
おしゃれななどが、うらがわ
からみると、とてもきれ
いだったからです。とくにノン

ネマイマイというがは、さく
らのはっぱのようなけがはえ
たしよっかくがあつて、おも
しろいなとおもいました。ず
かんでしらべてみると、けん
のようなかっこいいクワガタ
ムシのしよっかくに、みじか
くてほそいトンボのしよっか
くなど、いろいろなしよっか
くがあることもわかりました。
おにいちゃん、しよっかく
は、においやおと、さわりがこ
ちをかんじるんだよとおしえ
てくれました。

ぼくは、ほんものがみたく
なりました。むしをうらがわ
からみると、おもしろいはっ
けんがあることがわかったか
らです。ぼくも、いえにやっ
てくるむしたちのパーティーを
ガラスのうらからのぞいてみ
ようとおもいます。

《「虫のくる宿」森上信夫著
アリス館出版》



掲載の最優秀作品のほか、同
コンクールでは酒田・飽海地
区小学生から次の作品が「最
優秀」に選ばれました。

〈小学校低学年課題図書部〉
○最優秀

「なかまをふやすために」
〔『ひまわり』〕

内郷小 二年 阿部 未羽

〈小学校低学年課題図書部〉
○最優秀

「悲しみて気づいたこと」
〔『よかたい先生』〕

松陵小 四年 中村 元紀

〈小学校低学年自由読書の部〉
○最優秀

「海を知るといふこと」
〔『いのちあふれる海へ』〕

海洋学者 シルビアアール
内郷小 三年 三ツ澤璃慧

酒田市立図書館ホームページ
<http://library.city.sakata.lg.jp/>

発行 酒田市立中央図書館
酒田市立光丘文庫

酒田市立中央西町二番五九号
酒田市日吉町二丁目七番七号

電話(24)二九九六番
電話(22)〇五五一番

印刷 明徴出版